



17年度版「こくこ」一年(下)「くじらくも」  
柿本幸造 絵



17年度版「こくこ」二年(下)「音やようすをあらわすことば」  
杉浦範茂 絵



特集

座談会 教科書の挿絵を語る

光村図書出版(株)代表取締役社長

常田 寛

児童文学作家 石井 睦美  
児童文学作家 今江 祥智  
挿絵画家 杉浦 範茂

教科書の挿絵も少しずつ変わってきた  
石井 わたしは昭和四十年代の半ばくら  
いが小学校高学年だったんですけれ  
ど、そのとき教科書で読んだお話でい  
ちばん印象に残った作品に、どんな絵  
がついていたか今でもよく覚えてます。

今江 画家の名前は覚えていないの？

石井 覚えていないですね。作者名も  
覚えていないんですけど、ストーリー  
と絵は覚えてます。

今江 子どもって本当に作者も画家  
も覚えていない。でも、絵や物語は覚  
えている。

四十年代の半ばっていえば、福音館  
書店の『こどものとも』やちゃんとし

た絵本がぼちぼち始めたころですよ  
ね。それでも、『母の友』なんかでも、  
当時は二ページの見開きにお話が一つ  
あって、絵は一枚でした。一ページの  
場合は絵がなかった。だから、絵とい  
うのはあんまり重視してなかったみた  
い。なるべく物語をたくさん入れよう  
という考えだったのかな。

常田 そうですね。教科書も、物語が  
重要視されていて、文章を読んで学習  
させることに大きいウエイトがかかっ  
てました。でも、石井さんのお話を  
うかがうと、いい絵がどんなに子ども  
の印象に残るかということがよくわか  
りますね。

物語以外の教材にはあまり絵が入って  
なかったときに、光村では、言語教材こ  
そ今までと違うアイデアのある絵を入れ  
ていくということとで、そのとき、確か  
杉浦さんに絵をお願いしたんですよ。  
杉浦 人違いじゃないですか。そんな  
のかきましたか。

常田 言葉について勉強する教材です  
から、絵にかきにくいものが多いんで  
す。一年生のひらがな学習で、「まくら  
まくら」なんて言葉を対比的に絵に  
かいてもらったり、「明るい」という言  
葉の意味を絵で表してもらったり。新  
版では二年の下巻で、音や様子を表す  
言葉の絵をお願いしました。どんな絵  
にするかのアイデアが勝負で、難しい  
のは全部、範茂先生ならできるとい  
うのでお願いしちゃったんですよ。国語  
の教科書ではとても大事な部分なんで。

杉浦 そう言われるんですよ、大事だ  
とか、これはほかにはやる人がいない  
とかね。そうすると、ぼくも単純です

から、その気になってやっちゃったり  
して。アイデアがなかなか浮かんでこ  
ないことは確かでした。こういう絵は、  
楽しませようということよりも、アイ  
デアをよりおもしろくしていくことと考  
えてかいたような気がします。

常田 物語の挿絵も、少しずつ変わっ  
てきたという感じがあります。いかに  
も教科書的だといわれた時期がありま  
したが、ファンタジー作品が教科書に  
入ってきた昭和四十年の後半ぐらいか  
ら、挿絵の数も多くなり、質的にも変  
化して、内容的に豊かになってきたと  
いう気がするんです。それは、これま  
での教科書にはかかなかった画家の方  
が登場してくださったことが大きいで  
すね。

石井 「くじらくも」の柿本幸造さんや  
「やまなし」のかすや昌宏さんなんかは  
そのころに初めて登場された画家さん  
ですよ。わたしが使っていた教科書  
にはこういう絵はなかったと思います。



17年度版「国語」四年(上)「いろはにほへと」  
長谷川義史 絵



『光村ライブラリー・6』「はまへのいす」  
杉浦範茂 絵



昭和55年度版「こくご」一上「わたしとぼく」  
長 新太 絵

めには文章と絵の対応が大切だと思うんです。そこが絵本の絵の場合と大きく違うところで、教科書にかいてもらうときの難しさにもなるんじゃないかな。今江 さつき杉浦さんが言われたみたいに、絵本として別の人がかいているのをまたかけいのはどうですか？

杉浦 つらいですね。

常田 いやですか。

杉浦 いやというよりもね、チャレンジ精神はあるんですよ。やったろうじやないかって感じ。だけど、大変なことと確かに大変ですね。絵本のほうを否定してはいいいんですよ。こんなのだめだと思ってはいいいけれど、いい絵だと思っちゃってるでしょ。そうすると、どうしてもそっちへ引つ張られるんですよ。でも、そういうつらさはありませんけれど、チャレンジ精神というか、それを満足することはできません。まあ結果次第ですけどね。

今江 ただ、今の若い人たちを見てる

今江 長新太さんとか司修さんとか和田誠さんとか、当時はまだ教科書にかななかった人にも、ようやくかいてもらうようになった。「この程度の絵なら自分にもかける。」って言った先生もいたけど、とんでもない誤解というのかな。そんな見方をされていたからなおさら、光村としては大冒険だったよね。

教科書の挿絵は文章との対応が大切

常田 教科書は、絵本の作品を教材化することが多いんですが、絵はそのままは使えないんです。絵にできる場面数も違うし、本文と挿絵が合っていないと学習するときに困りますから。できるだけ絵本と同じ画家にかいていただくわけですが、作品によっては、別の方をお願いすることもあります。いずれにしても、学習する子どもたちが、豊かな想像を広げられるように自由に絵をかいてくださるようお願いしていましたね。そのことが光村の教科

とね、長谷川義史さんなんか、びっくりしますね。教科書の枠なんか飛び越えて、非常に自由な感じにかいている。

杉浦 長谷川さんは特にそういう感じしますよね。

今江 いや、おもしろいです。人柄は本当に礼儀正しいです。そやけど、絵はもう奔放ね。

石井 そうですね。子どもたちは、あいう絵と出会ってどう感じてくれるんじゃないかな。楽しみですね。

杉浦 教科書ってね、たいていおとなしくなるんですよ。教科書っていう舞台が画家に自己規制をさせてしまっただしょうね。

石井 かかれる方が意識しちゃっつ。

杉浦 何かね、それこそ、かく側も自己規制するんですよ。

石井 そう、とてま。

杉浦 文章もそうですか。

石井 文章もそうです。教科書とということがどうしても頭から離れなくて。

書らしきにつながっていたのかもしれない。

杉浦さんに物語で登場してもらったのは、山下明生さんの「はまへのいす」(昭和六十一年)平成三年掲載ですよ。今江 あれは、もともとは絵本ですよ。

杉浦 そうなんです。絵本の絵は渡辺洋二さんですね。それがまたいいんですよ。それをかけといっんですから。大変でした。

常田 教科書にかいていただいた絵は、海と浜辺がずっと帯状になっていて、場面に合わせて浜辺に置いてある一つのいすを中心に、海の波やいすの周りの様子が時間とともに変化していくんです。バックの色も変化していく。あれは見事な挿絵で、学習上も役立ちました。

杉浦 だけど、渡辺洋二さんの絵はすごく参考になりましたね、ぼくには。いい絵でしたから。

石井 子どもが作品をしつかり読めるた



『光村ライブラリー・6』「とびこめ」  
E=カリノフスキー 絵



17年度版「こくご」一年(上)「大きなかぶ」  
ヴェ=ローシン 絵

**杉浦** 長谷川さんの絵なんか見るとびつくりしますね。偉い人だと思えますよ。

現場で使い慣れた挿絵の変更は難しい  
**常田** 教科書の絵といつのはいろんな面で難しい。特に使い慣れたものを変えると現場からの非難が大きいですね。慣れれば落ち着くんですけど。

四年の「白いぼつし」は、昭和四十六年から六十四年くらいまではいわさきちひろさんの絵なんです。六十四年のとき、作者が文章に手を入れられてある部分が挿絵と合わなくなっちゃったんです。それで、つらいところですが、教材の挿絵なのでやむなく絵を変えざるをえなかったということがあります。その後、何人かの方からかいていただけてますが、何度やっても難しいものです。

**石井** 低学年であればあるほど、子どもたちは絵から物語を読むっていうこともありますが、この絵については、時間とともに定着して、今は違和感なく使っていたりしています。慣れて落ち着きたいいい例ですね。

**常田** でも、この絵については、時間とともに定着して、今は違和感なく使っていたりしています。慣れて落ち着きたいいい例ですね。

それまでの既成概念で縛られてるから、これは違つと言われて大騒ぎだったね。なんで光村はこんなものかかされたのかって。

由來話にふさわしい「スーホの白い馬」の挿絵とは

**今江** 外国の作品については、ずいぶん以前に、その国の人にかいてもらったほうがいいと言ったことがあるんですよ。その国の風土や文化などの面が大事ですから。これは実現されて、今はなくなっちゃったけど、「とびこめ」

(昭和四十六年〜平成三年掲載)は、ロシアのカリノフスキーという有名な画家にかいてもらったすばらしい絵だった。今の本では、一年生の「大きなかぶ」のほかに、「三年とうげ」を村民宜さん

とをするでしょう。教科書の挿絵からそのお話の細部を読み取ろうとすることが多いと思うんですね。だから、やっぱり絵と文章の違いにはすごく敏感ですよ。

**今江** 「大きなかぶ」の挿絵を変えたときも大変だったでしょ？この話は福音館書店の絵本で定着しきってたし、光村でも途中までは絵本と同じだったから。ところが、ロシアのローシンという画家にかいてもらったら、かぶが黄色かった。

**常田** そうです。あれは本当に困りましたね。いちいち説明できないですから。かぶが黄色いだけじゃなくて、種のまき方も、なかなか抜けないかぶの根っこの様子も、人物の服装もみんな違うんですよ。でも、その国の風土をわかった画家がかいてますから、文句のつけようがないですよ。

**今江** 教科書では初めての試みで当時画期的だったんですけども、みんな、にかいてもらってる。新しい教科書では、「スーホの白い馬」が中国の人にかいてもらってるんですよ。

**常田** この作品は、初めは少年スーホの物語として『こどもとも(普及版)』(一九六一年福音館書店発行)の絵本で出たんです。それがとてもよくて、二年生の教材にしました。ところがその後、福音館書店から大型絵本にするときに、大塚勇三さんが、前文と、最後の部分に「これが馬頭琴です。」っていう話を加えられて現在の由來話の形になったんです。

**今江** あの横長の絵本で見開きになると、本当にモンゴルの地平線が目前にずつと一面に広がる。それがとてもよくて。

**杉浦** 横長の絵本でしよう。だから、よけいに見開きがワイドになるんですよ。  
**常田** 教科書のほうは、教材化したときに初めて赤羽未吉さんにかいていたいたんです。その後、今のよう



17年度版「国語」五年(下)「月夜のみみずく」



17年度版「こくご」二年(下)「スーホの白い馬」  
リー=リーシアン 絵



れる絵やから。日本のものとは違うな  
という感じが伝わってくる。行ったこ  
とないけども、こつこつ広がりなんだ  
ろうなとかね。

**杉浦** やっぱり違うんですね。実感  
とつつか、体験してるとつつかは。

新版教科書、挿絵の見所は

**常田** 今までのお話の中でも新しい教  
科書の挿絵が話題に上りましたが、  
ご覧になってどんな感じでしょう。

**杉浦** 全学年が大きな判型に統一され  
ましたね。大判のレイアウトで成功し  
たなと思ったのは「月夜のみみずく」  
です。この作品は、絵本の絵をそのま  
ま使っている少ない例だけど、大判に  
なって、絵本の絵がうまく生きている  
なと思いました。初めのほうは絵本ふ  
うで非常にうまくいってる。こつこつ  
ページが一冊の中で三箇所ぐらいある  
と、教科書の印象が大分変わってくる  
んじゃないかなという感じがしますね。

大判になったり、教材の位置づけが変  
わってレイアウトも変わったりにして、  
その都度、かき直しをお願いしていま  
した。さっき言いました文章との対応  
を低学年では特に強く求められるから、  
そこがレイアウト上大変に苦心したと  
ころです。今使われてる絵は、確か、  
赤羽さんが晩年にかかれたものだと思  
うんですよ。でも最初のころの絵のほ  
うがはつきりして力強さがありました。

**今江** それにしても、そんなふうには何  
度もかき直してもらってるとはだれも  
思わないもの。ずっと同じのを使っ  
てると思われてる。

**石井** そうすると、この絵はもう遺産  
みたいなものですよ。そういう絵を  
今回の教科書で変えることにしたのは、  
なぜでしょう。

**常田** 最初はお話としてスタートしま  
したでしょ。ところが、由来話になっ  
たことで、話の背景となる風土が気  
になってくるんですよ。出てくる王様だ

とか、人々の食べ物や道具とか、ある  
いは、競馬の行われる所やその雰囲気  
とか、馬頭琴の実際の姿はどうなのか  
とかね。赤羽さんの絵はすぐれたもの  
として我々も認識しているんですが、  
今言ったような状況もあるので、思い  
切って変えてみようと考えたわけです。

**今江** 赤羽先生の絵を変えなければな  
らないというのなら、それはもう、原  
作の国の人にかいてもらおうしかない。

**杉浦** これは、どんな方がかかれた絵  
ですか。

**常田** 中国の方で、モンゴルにずっと  
住んでいらつしゃった方です。今は中  
国に戻られましたが。

**杉浦** やっぱり風景がいいですよ。ね。  
最初に出てくる草原の場面なんかい  
いです。

**石井** 空気感がとても伝わってきます  
ね。透明感とつつか。

**今江** 広がりもあるよね。しかも、今  
言われるように空気がちゃんと感じら  
れていて、いいと思います。

幼稚園でたくさんの本を見てきた子  
どもたち、ほとんどの子どもが、現状  
ではかなりの文章を読むことができ  
じゃあ、子どもたちは、小学校に入  
したときに何を期待するんだろうとい  
うと、「ああ、小学校に入るとこんなす  
ごいことをするのか」と思っ気持  
知的なものに対するわくわくする気持  
ち、そこが幼稚園から小学校に入った  
ときの喜びだと思っんです。一年の初  
めだから言葉はいらなとか、文字が  
いらなというのはちょっと違うんじ  
やないかと思っんです。やっぱり言  
葉があつて、そして絵の中にも言葉が  
あつてほしいんです。今回の第一教材  
でいえば、第三場面の絵に余白がある  
んですが、そこは、まだ自分もほかの  
友達もだれもない教室を想像する  
ページです。つまり、読み手の子ども



17年度版「国語」四年(上)「春のうた」



17年度版「こくご」二年(下)「いるか」



17年度版「こくご」一年(上)・第一教材



させたほうがいいでしょ？

**石井** 低学年も絵がないほうがいいのかもしいですね。

**杉浦** やっぱり、絵はないほうがいいと思いますよ。絵かきが言つのも変ですけど。

**常田** 低学年でもないほうがいいですか。

**杉浦** と思いますね。物語の挿絵でもそう思います。低学年の人たちから原則にはなくていい。ラジオとテレビと比べるとすぐわかるでしょう。ラジオのほうが広がりますよね。それを印刷物で考えると、テレビはイラストレーションになってきます。そうすると、ないほうが広がるという感じがします。

**今江** 一年生、二年生というのは、いったん絵を入れたら、全部入れないかんのかな？ 作品によってどっちでもいいというのはダメなの。

**常田** どっちでも入れなければいけないということはありません。絵があっ

たち(自分)がこの場所(教室)にいないときには余白があつて、そしてほかの子どもたちもだれもいない。だれもない教室は、全体がまだ見えていないんです。で、次のページには、もちろん言葉も出てくるけれど、人もたくさん来て、教室に差す光も変化して、場面も広がっているという、そういう感じが出せたらなと思いました。

**今江** アイデアとしてはすごくおもしろいよね。色なんかはもう少しメリハリがついてもいいと思うけど。

**杉浦** でも、子どもたちには抵抗なく受け入れられるんじゃないかという感じがします。大人が見ますとね、もうちょっと色をはっきりさせたいなというところが出てくるんじゃないかと思えますけど、それはあんまり気にすることはないんじゃないかと思えます。今の石井さんの話をお聞きして、あつ、そうだったのかつて思いましたね。

**石井** あまり説明的な絵ではないので、

たほうがいいかなという場合と、ないほうがいいのかとは、教材のねらいや位置づけに関係してくると思います。

**杉浦** もしどうしても入れるんだつたら、読者の中で作品の世界が広がっていく絵をかかなきゃいけない。枠になる絵じゃなくて核になる絵を。挿絵で言いますと、情景をあまりかかないほうがいい。その場所の背景はできるだけかかないほうが核になりやすいんじゃないかと思えます。

**石井** それはむしろイメージを広げていく世界のほうにいくわけですね。

**杉浦** そうなんです。詩だけだったらイメージを広げる能力のある読者が、絵があると、その能力が使えるなくなっちゃうんです。そこで止まっちゃうんですよ。そういう絵ではよくないという気はするんですけど。これは難しい問題です。

**常田** 今後、十分検討していきたいと思えます。

想像力をかき立てるところはとてもあると思うんですけど。

**常田** 一年上巻の教科書は、表紙をめくると「はる」という詩が飛び込んできます。

**石井** とてもいい詩ですね。リズムがあり、子どもたちの気持ちがいっぱい詰まっている。この詩には曲がついてるんですよ。みんなで大きな声を出してほしいですね。そして最初の教材につながるなんてすてき。

詩には挿絵がないほうがいい

**常田** 光村の教科書では、詩教材には、従来から三年生までは挿絵をつけている。そこから上の学年は挿絵はつけない、という考え方で編集しています。

**今江** 一年生、二年生、三年生は補助的に絵が入ったほうがわかりやすいこともあるやるけど、詩というのはそれこそ本当に、具体的に書いてあつても抽象みたくないもんやしね。自由に想像

杉浦範茂（すぎうら はんも）

1931年、愛知県生まれ。挿絵画家。グラフィックデザイナーとして活躍する一方、児童図書分野でも個性的な作品を数多く発表。昭和58年、『まつげの海のひこうせん』で第6回絵本にっぽん大賞、ポローニャ国際児童図書展グラフィック賞推賞を受けたほか、日本絵本賞、造本装丁コンクール・コネスコ・アジア文化センター賞など受賞作多数。



石井睦美（いしいむつみ）

1955年、神奈川県生まれ。児童文学作家。著書に、『ビッグパンのでんじくネズミ』（文溪社）『卵と小麦粉それからマドレーヌ』（BL出版）『パスカルの恋』（朝日新聞社『レモン・ドロップス』講談社・5月刊予定）



今江祥智（いまえ よしとも）

1932年、大阪府生まれ。児童文学作家。『ぼんぼん四部作』（理論社）など著書多数。近刊には、絵本『なんででんねん天満はん』（童心社）『子供の所持札公開』（みすず書房）



常田 寛（ときだひろし）

1940年、長野県生まれ。光村図書出版（株）代表取締役社長。昭和37年入社、教科書や教材集の制作にかかわる。

教科書には統一感がほしい

**常田** 教科書の今後をどう考えるかについて、それぞれのお立場で考えておられることをお話ししていただけたますか。

**今江** 前に話したことがあるけど、スイスの教科書が参考になると思う。画家に絵を応募してもらって、その中でグランプリをとった人が全部一人である本です。物語も詩も全部ハンス・フィッシャーさんという画家が一人で統一感があるのね。日本の教科書はそれが全くないですから。ばらばらな感じ。

**常田** 教材ごとに違つので、ばらばらな印象をもたれるんですよ。

**石井** でも、逆に、ばらばらな感じはするんですけど、受け手である子どもは結構タフなので、大丈夫じゃないかという気もしますが。

**今江** 一つの教材を長い時間かけてやるわけで、それでは飽きるよね。だから、それによって変わってくると思うんです。

**石井** 教科書的な人物でも悪いことはないんですが、とてもまじめな気持ちになってしまつたという感じはします。

**杉浦** そうすると、やっぱりこれからの教科書はもっと変化を求めていくということになりますね。

**石井** すべてがカラーページなのも疲れるんじゃないかという気がします。そうでなくてもいいのでは。

**今江** だから、うんと色を使うところと、二色にして色を抑えるところも考えるといいんだよね。

**常田** 二色を上手に使えば、学習の効果も上がるし、美しい仕上がりも期待できますね。

**石井** 無茶な話かもしれませんが、統一感ということからいえば、今、上と下の二冊に分けている本を、お話が集まった本と、言葉を学習する本との二冊に分けたらどうかと思つたんですが。

ら次はころつと変わったほうが先生も生徒もええのやろなと思つた。ただ、今のようならばら感があるままでもいいと思えない。今言ったような教科書もぜひ参考にしてほしいです。

**常田** 確か、日本の教科書とは編み方が違って、読み物集のような教科書ですよ。だから統一をとりやすい。

**今江** そう。全部で十五編、昔話が五編と、物語が十編ぐらい、ほかには詩がしっかりと。日本はそうじゃなくて、一つの教科書に、作文も物語も言葉の勉強も何もかも全部入れようとする。ほんと、こつた煮なんですね。

**杉浦** いろいろな意味での全体の統一感、本を作るうえでは絶対必要です。例えば、学習の場面に出てくる子どもたちをかいた絵でも、今の本は、比較的教科書的なかきよつ人物もいれば、そうじゃない人物もいます。これからの教科書としては、教科書的な雰囲気を出したいのか、教科書から離れた

**杉浦** ほかもそう思いました。

**石井** 統一感も出るし、子どもたちもこつちの教科書は、読んでどういふことを感じるかを学ぶ。もう一冊では、自分が言葉を獲得することによって、どうやって文章を書いていくかとか、読むときの力になる文法的なものとか、そういうものを学習する本だということに分けたら、とても子どもたちの力がつくと思つたんです。

**今江** そういうことはできないわけですか。何か決まりみたいのがあるわけ？

**常田** いろんな問題があると思います。でも、教科書の編集をスタートさせるときには、その話は必ず出るんです。やっぱりみんなの中にあるんですよ、思い切つてそういう教科書を作ってみたいという思いが。内容的にも体裁の面からも、今後さらに実現に向けて考えていきたいと思つています。

本日はありがとうございました。